

甚大な凍霜害

伊達崎地区にある3・5畝もの広大な桃畑に、蓬田進也さんの姿があります。高校時代、一度企業への就職も考えましたが、父の勧めで茨城県の果樹研究所へ進学。農業を専門的に学ぶうちに心が決まり、父・幸夫さんの跡を継ぐと、20歳の時に就農しました。今年、3月の温暖な気候で、例年に比べて早く花が咲き、その後4月に氷点下まで冷え込む日が4日間も続きました。この異常気象により、冷気がたまりやすい低地では、花のめしべが枯死。伊達崎地区の大半の桃農家が、甚大な被害を受けました。

蓬田さんの畑も、木の2/3以下の部分が霜にやられ、ほとんど実が成りませんでした。「お前はもう来年だな。来年頑張れよ」と木に語り掛ける蓬田さん。「一昨年は台風19号、昨年はせん孔細菌病、そして、今年は凍霜害。ここ数年は思い通りの農業ができず、収穫量も芳しくない――。でも、落ち込んではいられないよね」と笑い飛ばします。気持ちを切り替え、今回の霜の流れを調査し、周りの農家と情報交換しながら、来年以降に向けた対策を練ります。

「今年もおいしいね」その言葉が原動力

CASE 2 伊達崎（前屋敷）
蓬田 進也さん

父の背中を追って

「周りの農家さんから、『幸夫さんがいたから、桑折町でこんなに桃が広まったんだよ』と声を掛けてもらうことが多い。積極的に他県の先進地を視察し、技術や栽培体系を学び、桑折町へ普及していった父。とても誇らしい」と尊敬のまなざしを向けます。

就農して7年の月日が経ったところ、そんな父の存在がプレッシャーに。自分が跡継ぎでいいのか――と思い悩む日々。それでも、「20歳の時、自分で決めたじゃないか」と初心を思い返し、

「俺がこの道を選んだのだから、最後までやり通す」と腹をくくりました。

覚悟を決めた直後、未曾有の東日本大震災が発生。「放射能被害で、もう桃は作れないかもしれない。お前も別な就職先を考えろ」と幸夫さん。「俺のことを思ってくれた言葉だと分かった。でも、もう腹くくったから」と親子二人三脚で乗り越えることを決意。念入りに木を除染し、現在の安全安心な桃づくりへとつながっています。

「今まで色々あったけれど、毎年おいしく食べてくれるお客さんがいればそれでいい」と白い歯をのぞかせます。



1_ まもなく収穫を迎える主力品種「あかつき」。桃の成長ぶりを楽しみにしながら手を動かす蓬田さん 2_ 高品質な桃を作る蓬田さんの桃畑は美しく、まさにお手本

桑折の桃で笑顔広がる――

28年目の献上桃が誕生

こうした桃農家の努力が報われ、今年も県から献上桃の指定を受けた桑折町。町の主力品種「あかつき」の収穫時期を迎えた7月26日、JAふくしま未来桑折総合支店で、皇室や宮家へ献上する桃の選果・箱詰め式が行われました。

会場には、当日の朝収穫された約13万個の中から、光センサー選果機で糖度12度以上と選別された約600個の桃がずらり。そこから、JAふくしま未来の数又清市代表理事組合長や高橋宣博町長、生産関係者、県職員らが白手袋をつけて選別。形や色付き、傷の有無などを目視で確認しながら180個を厳選し、本町28年目の献上桃が誕生しました。

「桑折の桃、甘くて大好き」と毎年この時期を楽しみにしている佐藤未沙希さんと永菜ちゃん親子（諏訪）



1_ 一つ一つ丁寧に桃の状態を確認しながら、皇室に贈る献上桃を選びました 2_ 味もさることながら、形も美しい最高品質の桃

数又組合長は「難病が続く、生産者が心を痛める中、今年の指定は大きな励みとなった。28年の歴史が、さらに産地の活性化につながっていく」と話し、高橋町長は「3年連続して自然災害を被る中、生産者や農業関係団体の皆さまの桃にかける熱意とたゆまぬ努力のたまものである」と桃農家を称えました。

桑折プライドがつなぐ未来

このまち自慢の、高品質な桃。わたしたちが毎年おいしい桃を食べられるのは、度重なる逆境を乗り越え、畑で汗を流し続ける人がいるからです。

「『おいしい』と食べてくれる人がいる限り頑張れる」「せっかく築き上げてきた『献上桃の郷』を無くしたくない」と多くの桃農家が口をそろえます。自然災害などの厳しさがある一方、夢もあるのが農業。何が起きても、前を見据え、明るい未来と夢に向かって、歩み続けます。

